

ブリタニカ国際年鑑(一九七八年版)

壁新聞のメカニズム

中嶋 嶺雄

中国のコミュニケーション構造の特徴は
〈顕教性〉と〈密教性〉の二重構造である

壁新聞のことを中国語では大字報ダズバオという。文字通り紙に大きく字を書いて壁面に張り出すという、もともとブリミティブなコミュニケーションの手段である。半紙にガリ版刷りなどで書いた小型のものを小字報シャズバオともいうが、大字報にせよ、小字報にせよ、とくに形式や規格が定まっているわけではない。このように記してみると、壁新聞とは、なにも中国特有のコミュニケーションの手段ではなく、きわめて初歩的かつ一般的なコミュニケーション手段であって、たとえば、日本の大学のキャンパスに見られる張り紙や、タテ看板なども、一種の壁新聞だといえなくはない。しかし、壁新聞は、まさに中華人民共和国のこれまでの激動の政治過程において、きわめて重要な政治的役割を果たしてきたのであり、「毛沢東政治」の特殊な政治技術を実現するための不可欠な手段でもあった。

世界を驚かせた一九六六年夏以降の紅衛兵運動は、同時に壁新聞を全中国に氾濫させて、いわゆる文化大革命を開幕させたが、このように、中国の壁新聞は、『人民日報』(中国共産党機関紙)や『紅旗』(中国共産党理論誌)に代表される公式のメディアにたいして、いわば非公式のメディアとして大衆運動や政治闘争の、とくにその初期に決定的な役割を果たしてきたといえよう。このような中国の壁新聞は、中国の政治過程において、特殊な存在であり続けてきた歴史があり、はやくも五七年の「百花齊放・百家争鳴」運動の時期に壁新聞は北京大学ほかの拠点で運動の高揚を支える重要な役割を演じた。六六・六七年にかけての文化大革命初期の壁新聞の洪水は、

壁新聞が全世界に知れわたった時期でもあったが、その後七三・七四年の「批林批孔」運動でいくたびか壁新聞が現われ、七七年初頭には鄧小平再復活要求の壁新聞が北京に張り出されて注目を集めた。

このような壁新聞には、壁新聞を書き、それを張り出すことによって、政治参加を遂げようとする作製者の意見表明、上級幹部や組織・機関にたいする批判(しばしば事実暴露)という二つの機能が混在している場合が多いが、同時に、そのような行為が作製者の意図を超えて中国共産党内部の不断の政治闘争・党内闘争の一環として位置づけられていると見做すこともできよう。つまり、壁新聞の出現と消失それ自身が中国内政の直接的反映なのである。

壁新聞取材記

私自身、壁新聞の洪水のなかに身を置いた体験をもつが、壁新聞の性格を浮彫りするために、その体験を語ってみたい。

それは私が最初に中国を訪問した六六年十一月のことであり、紅衛兵運動がまさにピークに達していた時期であった。北京でも上海でも南京でも広州でも、いたるところに紅衛兵の群れがあった。当時は文化大革命の性格がようやく明らかになりつつあった頃であり、劉少奇、鄧小平ら実権派の打倒こそが当面の目標であることが次第に明白になりつつあった時期であった。それだけに、いわゆる文革派と実権派の抗争に由来する武闘が各地で頻発しはじめていた時期でもあった。とくに上海では、安徽省蚌埠市で中国共産党市委員会と紅衛兵大衆とが対

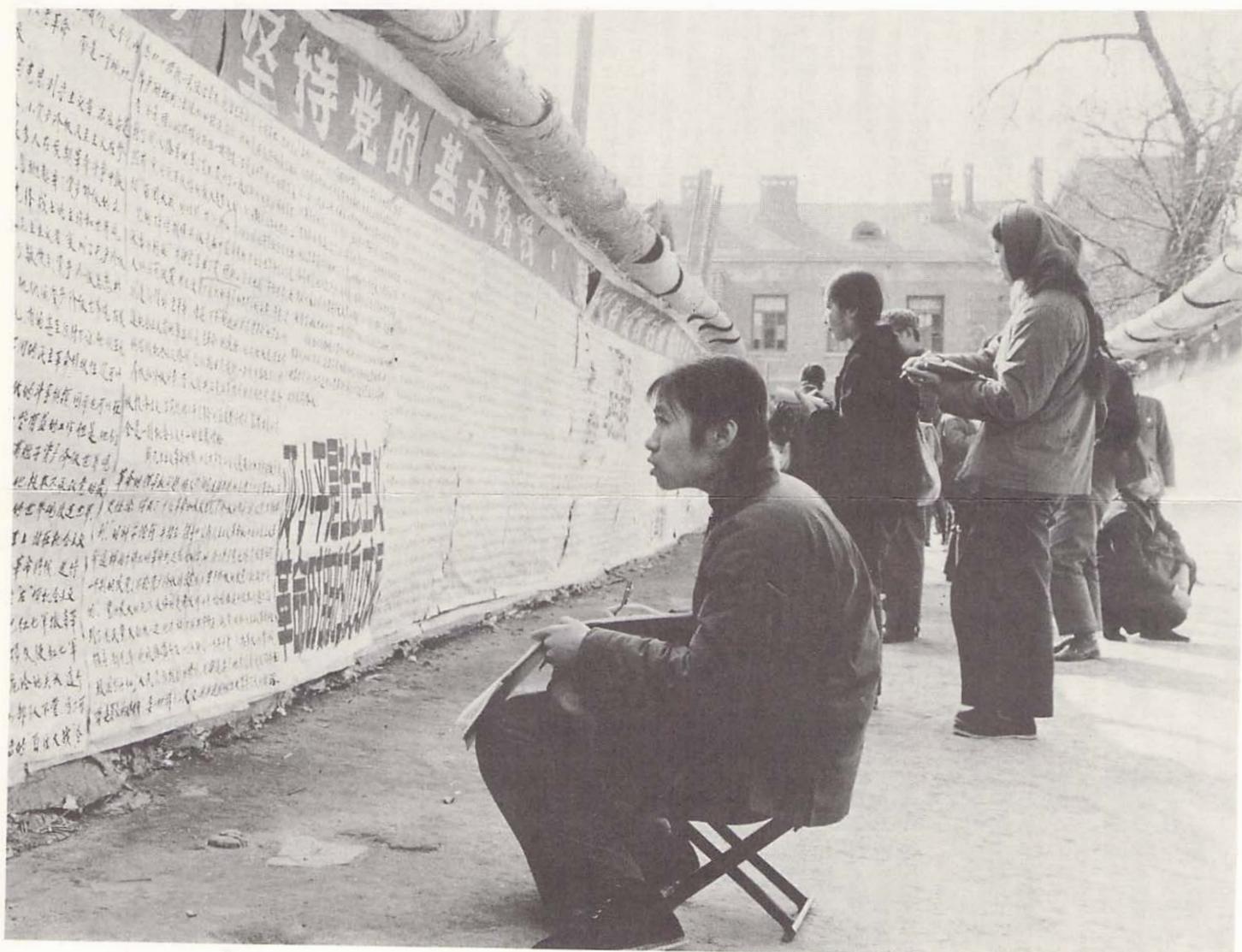
立した流血事件の生々しい情景を伝えるスナップ写真入りの壁新聞が、和平飯店の壁面全体に張り出されておたりした。「ファシストを打倒せよ」とあちこちに書いてあり、(外灘)の人影まばらな一角を歩いていると「鄧小平は資本主義の道を歩む党内の実権派である」と題する、ワラ半紙にガリ版刷りの粗末な大字報(正しくは小字報であろう)が、ほとんど人目につかないかたちで張り出されているのを眼にとめた。これが鄧小平批判の壁新聞第一号だったのである。注意深く読み進んでゆくと、劉少奇が党内第一の実権派であり、鄧小平は第二の実権派であって、ともに当面のもっとも危険な敵として打倒すべきことが書き込まれてあり、さらに次のような罪状が記されていた。すなわち、鄧小平は六五年二月九日から十九日まで北京の国際飯店で第一回の反革命陰謀の会議を行なったこと、同年三月三日、三月六日の会議でも毛主席に反対する策動を行なったこと、また五六年のソ連共産党第二〇回大会に際し、フルシチョフに合唱して個人崇拜に反対して以来、六二年、六四年にも資本主義の道を歩む陰謀を企図したこと、などが詳細に書き込まれていた。六五年二月三月という、ベトナム戦争での北爆が開始された時期でもある。このような壁新聞の内容は、当時としてはきわめて衝撃的なものであり、私はこの小字報に接して内心の高まる興奮を抑えがたかった。しかも注目すべきことに、この小字報の署名者(作製者)は、文化大革命での壁新聞第一号としての北京市党委員会批判の壁新聞を五月二十五日に北京

大学に張り出して、毛沢東主席から「二〇世紀六〇年代の中国のパリ・コミューンの宣言書」だとたたえられ、この壁新聞第一号を全国放送するように指示された北京大学の女性教師・聶元梓以下一〇人の連名であり、文末には、「死を誓って毛主席を守ろう！」とあったのである。私は、この小字報の重要性に気づき、懸命にメモをとっていると、どこからともなく、およそ一時間まえに和平飯店まえの武闘の様態を報じた壁新聞を、カメラに収めようとしてさえぎられたときの紅衛兵幹部があらわれ、私のメモを破りすてしまったが、とにかく私には印象深い経験であった。

ところが、それから数日を経て、広州に滞在していたとき、この小字報と同じものが、今度は大きなペーじユ色の半紙に立派に活版印刷されて張り出されていたのである。しかも、その街頭では、おそらく劉少奇や鄧小平を名指して批判した最初の公開記録であると思われるこの壁新聞を、紅衛兵たちではなく大人たちが食いつけるように真剣な眼差しで、しかもみな沈黙のうちに読みふけていたのであった。

壁新聞の機能と効用

すでに見たように、壁新聞はもつともプリミティブなコミュニケーション手段であるだけに、きわめて多種多様であり、文化大革命の混乱期に氾濫したように、各人、各グループが、「違反有理」のスローガンに鼓吹されて、身近な工作单位、末端機構で上級の幹部を批判したり、その罪状を暴露したりする即事的かつ民衆的なものから、右の聶元梓らの壁新聞に見られるように、高度の政治性を帯びた全国的・組織的なもので存在する。後者の場合には、壁新聞はすでに党中央の意志（およびそのような意志を体現したニュース）の伝達という政治的機能を果たすためのものであり、しかも、当初のガリ版刷りから活版刷りへの移行は、状況の推移に応じて巧みに党内闘争を大衆運動化し、最終的には毛沢東主席ないしは党中央の権威によって、決定的な状況をつくりだす毛沢東政治の典型的なプロセスに不可欠な手段として、壁新聞が位置づけられていることを物語る。もとより、党中央の意志を体現したニュースや指示の最終的な伝達は『人民日報』などの公式のメディアが果たすので

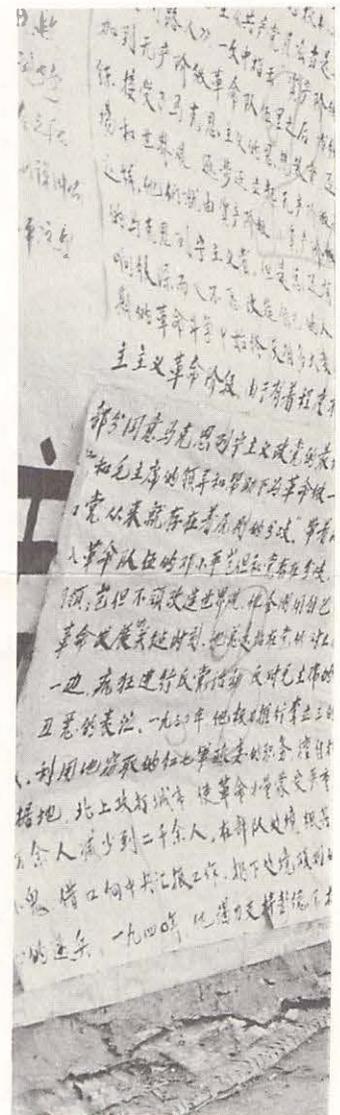


あり、また、文化大革命の激動期には、しばしば毛主席「最高指示」や「海報」と呼ばれる、一種の「御触れ」のようなコミュニケーション手段も存在したが、党内情勢によって直接このような公式の通達がなしくい状況、もしくはそれではあまりにも衝撃が大きいのと思われる場合には、右の鄧小平への名指しの批判の壁新聞に見られるような過程を経て党中央の意志が壁新聞によって大衆に伝達され、政治情勢を変化させていったのであった。このような政治状況のなかで、壁新聞はきわめて有効なメディアであった。そして、党中央自身、壁新聞のそのような効用を十分に認識し、政治的キャンペーンの重要な手段として位置づけていることはいうまでもない。紅衛兵運動が高揚する直前、『人民日報』は、壁新聞の意義について、こう述べている。「革命的な壁新聞は、正邪の根本的な問題を提起し、それをあらゆる者に論議させ、検討させ、批判的に評価させることによって、二〇年間の大衆の教育を、ことに若い世代にプロレタリアの意識を起させる点で、一日のうちに集約する」(『人民日報』一九六六年六月二十一日)。

壁新聞とコミュニケーション構造

国際共産主義運動において、大衆の教化のための伝達と宣伝は、もつとも重要な要素である。それだけに、壁新聞は古くはホルシェビズムの主要なメディアの一つでもあった。だが、今日の中国において、壁新聞は、これまでの国際共産主義運動の歴史に例を見ない効力を発揮し得たのであり、この点で毛沢東政治と壁新聞は不可分な一体性を有してきたのである。それはなぜであろうか。毛沢東自身、しばしば壁新聞の有効性について語っており、「大鳴・大放・大字報」という毛沢東政治のユニークな側面をも指摘しなければならぬが、しかし、より根本的には、今日の中国のコミュニケーション構造に照して問題を考えるべきであろう。

現代中国のコミュニケーション構造における第一の特徴は、社会的コミュニケーション構造における「顕教性」と「密教性」の二重構造という特徴である。つまり『人民日報』や中央人民放送局の放送などの公式の「顕教的メディア」に加えて、壁新聞は、非公式な「顕教的メディア」の代表的存在だといわねばならない。一方、



「密教的メディア」としては、『参考』消息」など『人民日報』よりも発行部数が多い幹部用新聞『人民日報』の発行部数は七二年秋の段階で三四〇万部、現在四五〇万部前後と推定されるのに対し、『参考消息』は七五〇万部前後と推定される、党中央の秘密通達、秘密文件(たとえば『中発〇〇号文件』)などの公式の「密教的メディア」と『毛沢東思想萬歳』や各種紅衛兵新聞などの非公式の「密教的メディア」が存在し、中国の政治は、これらのメディアを状況に応じて有機的に活用することによって貫徹してきているのである。

第二の大きな特徴、そして壁新聞の特殊な有効性を支えているもつとも重要な特徴は、中国社会の極度の非情報的性格という体質である。中国社会では、たとえば、正統的なメディアである『人民日報』がほぼ二〇〇人に一部の普及率しかもっていないこと、一般民衆にとつては、他県(県は日本の郡程度の規模のものが多い)へ行くにも通行証が必要ことから、中国社会が極度にモビリティの低い社会であることとともに、コミュニケーションの「受け手」の側における極度の非情報性が現存している。一方、「送り手」の側であるマス・メディア自身も、たとえば林彪異変というような深刻かつ重大な内政問題を一度も報道したことはなく、田中元首相逮捕というような隣国の重大ニュースも一般には報道されなかったことと示されるように、政策的な配慮に基づく非情報性を基本としており、『人民日報』や中央人民放送局は、いずれも党中央ないし国家の意志を伝達する機能のみを圧倒的に果たすのであって、速報性、社会性を重視したニュースの伝達手段ではなく、政治的・思想的オリエンテーションの手段なのである。もとより中国のマス・メディアには三面記事的な社会面的ニュースは皆無に等しい。一方、中国人ほど、そのような社会面的なニュースに本来、敏感かつ関心の高い国民はないようにも思う。

こうした断絶こそ、中国において壁新聞が大きな有効性を発揮する最大の社会的背景だといえよう。この点で、「批林批孔」運動の時期の七四年六月二十八日付北京A F P電が「市民たちが通常情報源としての公式報道機関は、センセーショナルな内容の事件についてはいっさい無視しているので、市民たちは壁新聞を見て情報の穴を埋めているように思われる」と語っていたのは、きわめて正しい指摘である。

そして、壁新聞への大衆の関心と参与は、情報にたいするそのような欲求不満の暴発であり、また、情報を直接的に抑制ないしは独占してきたと大衆が認めた者(たとえば実権派の幹部)への大衆の反逆でもあったといえよう。だが、いうまでもなく、この場合の大衆の反逆には、つねに一定の限界が設けられていた。こうした状況の背後には、つねに政治の強い糸が結ばれているのである。

なかじま みねお 東京外国語大学教授 国際関係論

参照項目
3巻 コミュニケーション
7巻 新聞
13巻 中国
13巻 中国史
13巻 中国哲学